

先人のことばは人生の節々でよみがえる

ANA ホールディングス会長
経団連政治特別委員長
外交委員長

かたのざか しんや
片野坂 真哉



「人生相見ざること動もすれば参と商の如し／杜甫」

50年前の鹿児島の高校時代、古典の最後の授業で、クラス担任でもあった成田先生が黒板に書いた言葉である。「参は冬の星座オリオン座、商は夏の星座さそり座。この二つは同じ天空に同時に現れることはない。皆さんはこの学園で6年間、共に学んできたが、いよいよ卒業して離れ離れになる。人生においては一度離れてしまつと、なかなか再会の機会がないものだ。後になって、一緒に過ごした友との時間がかけがえないものであったと気付く」

これが先生の送別の言葉であった。卒業生の多くがこの詩句が載っている『唐詩選』を買って求め、この詩が、「老いた杜甫が旧友を訪ねて一晩温かいもてなしを受け、杯を重ねながら、明日再び別れると次はもう会えないかもしれない」との思いをうたった長い詩の「一節」と知る。

成田先生は非常に厳しく、生徒からは恐れられる存在だったが、実は「同窓会で再会したい」先生の第1位で、「今でも『ナリタ』の授業が一番思い出される。その教えが人生の中で結構役に立つんだ」との声がよく聞かれる。

最近、管理職から、若手を厳しく指導するとバワハラととられかねないため、叱ることをためらう場面が多いという悩みを聞く。そのたびに、私は成田先生を思い出す。

卒業30周年の同窓会で、先生が模擬授業で採り上げた漢詩は、「子を責む」であった。自分の5人の子どもたちはどれも出来が悪いとぶつぶつ言いながら、一人酒を飲んでいる男の様子を詠んだ陶淵明の詩である。

先生いわく、「皆さんが高校の授業で習った時には、この詩の意味を一応は理解したかもしれないが、本当の親の気持ちにはわかっていなかったはず。実際には、この主人公は子どもの不出来を嘆きながら親らしい深い愛情に満ちている。皆さんも結婚して子育てを経験し、今の年齢になったことで、ようやく理解できるだろう」と。

深い言葉は、聞いた者の心に長く残る。そのため語る者は、聞く者の年齢、経験などに思いを致す必要がある。年長者が若い人に語りかけるのに遠慮は要らないが、十分に相手を観察したうえで、自ら発する言葉を研ぎ澄まし、思いを込めて語りかけるべし、と思う。



卒業アルバム・左上が筆者